

「今日のキリスト、今日のパン」 礼拝に於いて、今日のキリストをどう表すか

坂本 誠

序

本論の主題として与えられたのは「現在ご自分の教会で実践されている礼拝における聖餐を論じ、何故そのような聖餐に至ったのか、福音主義神学の教会が聖餐に対して取り組むべき課題、見落としている点や克服しなければならぬ点などを論じること、新たな聖餐の恵みを福音主義教会が享受できること」である。

筆者は、礼拝、特に聖礼典、及び、教会法の二分野の成熟が、福音派教会に必要不可欠だと考えている。教会法が自律的教会に必要不可欠なのは、自分自身で自分自身の信じ行うことを規定し、自ら進んでこれを遵守することこそ自律の意味するところだからである。さらに根本的なことは、教会の生命そのものである礼拝について、教会自らがよく考え、定め、実施していくことである。特に聖書に立脚していることを標榜する教会であるなら、それらしく自らの礼拝を整えることは必然である。それは礼拝が「神と人間との関係の写し」だからである。畢竟、私達にとって必須なのは教会法と礼拝式文の文章作成能力なのである。

礼拝が教会にとって最も重要な働きなのは、アウクスブルグ信仰告白7条が記す教会の二つの印が実行される場だからである。聖書に従って福音が説教され、聖書に従って洗礼と聖餐の二つの礼典が執行されることは、教会の印であ

ると同時に信徒の印であり、牧師職の主要な働きの内容でもある。牧師の職務は説教と聖礼典の執行に尽きるのである。説教に比べて聖礼典の工夫や熱心さはどうだろうか。多くの神学校において説教や説教演習には時間が割かれていても、礼典演習はほとんど行われていないのではないだろうか。聖書主義と言っても、結局、出身教会や先輩牧師を真似ているに過ぎないのではないだろうか。洗礼は感動をもって行われているであろうが、聖餐に関してはさしたる工夫もなく漫然と行われがちだと言えれば過言であろうか。それはとりもなおさず、今まで福音派教会では聖餐がなおざりにされ、筆者を含めて牧師自らも聖餐に感動をもってあずかるという経験に乏しいからではないだろうか。

こうした反省の下に、筆者の牧会する教会は、とにかく主日にこの教会に来ればきちんとした礼拝に参加できる教会にしたいと願ひ、そのため礼拝の全体像と各項目を吟味して御言葉の説教と聖礼典が的確に行われるように工夫している。その際、聖書を下敷きにしながらも、教会史上、実践された先例に深く敬意を払うことにしている。礼拝は、全世界の教会が2000年にわたり、毎主日、工夫に工夫を重ねて形成してきたものだからである。

I 当教会の礼拝の方針

「その日のキリストを示す」ことを基本方針としている。これは端的に言えば、その日の礼拝のテーマを一つの上に絞り込み、それが明確に示されるようにすることである。礼拝は、第二バチカン公会議典礼憲章10が記すように「教会の活動が目指す頂点であり同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉」である。その礼拝の中心にある御言葉と聖餐において、その日のキリスト＝その日のテーマが表現されるように心がけ、そこから教会が力と方向性を得るようにするのである。その他の項目はこの目的のために配置と内容を定めているのである。

重要なことは説教のみならず聖餐においても、その日のキリストを表現することである。御言葉の説教がその日固有のテーマを扱うことは勿論であるが、聖餐もその日固有のテーマを担い、その日のパンその日のキリストの体を提供できるように配慮するのである。いわば、聖餐礼拝のたびごとに、異なる味のパンを食すことができるようにするのである。パンは毎度、同じ味ではな

いはずである。降誕祭の頃に行う聖餐式と、受難週の頃に行う聖餐式、復活祭の頃に行う聖餐式は違って然るべきではないだろうか。

ハイデルベルグ信仰問答第65問に「信仰のみが、わたしたちを、キリストと、そのすべての恵みに与らせるのであるならば、その信仰はどこからくるのですか」とあり、答は「聖霊が、わたしたちの心の中に、聖なる福音の説教によって、信仰を起こし、それを、聖礼典を用いることによって、確認してくださるのです」である。説教で語られたことが聖礼典によって確認されるという仕組みである。説教の内容は毎回変わり、そのことに説教者は腐心するのだが、説教の内容は果たして聖礼典に反映され確認されているだろうか。毎度、式文の棒読みではその日の説教が聖餐に連結されないのではないだろうか。同第67問には「それでは、御言葉と聖礼典は、二つながら、わたしたちの信仰に、わたしたちの救いの唯一の根拠として、十字架のイエス・キリストの犠牲を指し示す、ということに向けられているのでしょうか」答「もちろんです。わたしたちの救いの全体が、十字架でわたしたちのためになされた、キリストの唯一の犠牲に基づいているということを、聖霊は、福音において教え、聖礼典において確認し給うからです」とあり、御言葉と聖礼典が、二つながら両者相俟って同一の目的を目指し、教えられた事柄が確認されると言われている。言葉をもって啓示された事がパンの下に提供され、それを食べ飲むという生々しい行為によって、腑に落ちるものになるのである。御言葉のみの一頭立て馬車よりも御言葉と聖餐の二頭立て馬車の方が、より馬力があり強力であるに違いない。私達の礼拝で欠けていることは、説教と聖餐が乖離している点にあり、これは大変、惜しい事態なのである。

II パンの区別

その日のキリストを示すためには、パンに区別を設ける必要がある。1コリント11:29には、我が身を吟味することに加えて「みからだをわきまえないで飲み食いする」とある。わきまえる＝ディアクリノウは間を分けて検分し、区別をつけることである。自己の吟味と主の体の検分の二つが要請されていると読める。

区別には二段階ある。第一の区別は、通常のパンと聖餐のパンの区別である。第二の区別は、他日の礼拝で食したパンと、今日の礼拝で食すパンの区別である。

A 第一の区別

通常のパンと聖餐のパンの区別については、聖餐論争で語り尽くされてきた。全実体変化説とそれに対抗する宗教改革者たちの諸説は本稿では扱わない。区別の付け方として、聖霊の働きによるのか御言葉の働きによるのか、祈願によるのか聖書朗読によるのか、奉献奉挙などが必要なのか、質料形相と言う考え方が良いのかどうか、キリストの人性における体は遍在なのか偏在なのか、物素の形相が残っている間なのか礼拝の時間内場所内なのかと言った議論があることはよく知られている。区別がどのようなようにして起こるのかの説明は異なっているにしても、いずれの説でも、最低限、通常の食用のパンと聖餐用のパンの間には何らかの区別を設けることは認めている。主が奉納されたパンと杯を取り「且つ「これは」と仰せになった」ということは、手に取ったパンと杯は手に取らなかったものとは異なった扱いをされたということである。つまり、手に取った物の、他の物からの分離と特定が同時に起こったのである。主は、その手に取ったところの区別された物＝分離と特定を経た物を差し出しつつ「これを取って食べ、飲む」「私を覚えるためにはこの方法で行え」とお命じになられたのであった。

私達も、我が家の食卓上に置かれたパンと、祈りなり聖句なりを経て牧師の手から渡されたパンを何らかの意味で区別し、何かが違っており、両者は混同されてはならないという心持ちになる。この「何かが違ってはいる」ということをまずは認めなくてはならないのである。分かつとは分けることである。どこがどのように、何故、違うのかを説明することが肝要である。もし、区別や違いを認めないということになれば、聖餐式の場において、聖書朗読や祈りを経て牧師の手から差し出されたパンと、その日の朝食で食べたサンドイッチとは何の違いもないことになる。極論すれば、配餐されたパンを食べず、自分で昼食用に購入したコンビニのパンをかじっても良いことになるであろう。聖餐と愛餐の間の混濁も生じて来るであろう。いずれにしても、何らかの意味で、通

常の食用のパンと聖餐式用のパンの間には区別があることは認めているであろう。何かが違うのであり、違ってはならず、違ってはいるということは、聖なる畏れと深い関係があると言えよう。

世の中には無数のパンが存在するが、大別すれば、通常のパンとキリストの体であるパンの二つになる。全実体変化説によれば、1・通常のパンとは、質料も形相も共にパンであるパン。2・キリストの体であるパンとは、質料は歴史的実在としてのキリストの体そのものであるが、形相はパンのままであるパンである。そのため、意向においては、本来はキリストの意向を深く弁えてこれを執行し且つ受領すべきであり「これがキリストの望みだ」というところまで求めるべきだが、実際はそこまでは求めず「これは教会で行っていることだ」ということで足り、最低限「このパンは通常のパンとは違う」と分かればよいのである。これは消去法による。世の中には二種類のパンしかないのだから、通常のパンとは違うと分かれば、結局、上記2が残るのである。

当教会では「命のパン、救いの杯として聖別してください」と、一応、聖別という文言を祈禱に入れている。これは全実体変化説に依拠していることではない。ここで言う聖別は「使用目的の限定、用途限定」を意味している。この祈りを教会挙げて祈った以上、この聖卓に供えられたパンと杯は「キリストを記念するために食し、飲む」こと以外には使用せず、ひたすらこの目的のために限定的に使用するのである。従って、聖餐後に物が残ってしまった場合、牧師が全て飲食し消費している。

普通のパンと聖餐のパンの違いは様々な方法で認識される。「これは」は何を意味しているのだろうか。「これが」「これは」として扱われるのだろうか。筆者は聖餐式の四行動「取り、感謝し、割き、与える」を重んじて「パンを取り」と言った時には実際にパンを取り、「割き」と言った時には実際にパンを割くようにしている。こうして、このパンが普通のパンとは異なるもので、区別すべき物だということを表現している。スコラ的には「これ」には色々と議論がある。物と言葉の一致が問われ、物理的な一致、時間的な一致、認識の一致などが指摘される。物理的にはパンと杯の置かれた位置の問題である。「これ」と客観的に言えるには通常、聖卓の上に置かれたものを指すであろう。聖餐式の際に別室に置かれていたものは「あれ」「それ」であって「これ」ではない。時間

的とは昨日ここに置いてあったとか、明日ここに置かれるであろう、今ここにない物は「これ」ではないと言った問題である。また、司式者の認識の問題もあり、落下していたのに気付いていなかった場合などが該当する。このような議論は些末拘泥主義の観があるが、現実には追加資料の問題に関わってくる。聖餐式でいざパンを配ろうとした時にパンが不足していた場合、パンを追加しなくてはならないが、その際の扱いはどうすべきなのであるか。筆者は「あれ、それ」の場にあった物を使用する場合には、再度、制定文を読むべきだと考える。卓上に置かれていたものであるならそれは必要がなくなる。

B 第二の区別

他日の礼拝で食したパンと、今日の礼拝で食すパンの区別については本稿の目的とするところである。あの日のパンとこの日のパンは、同じキリスト、同じパンであっても異なるものであり、同じ味がしないはずである。2 テモテ 2:8 「ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思って（アナムネオー）いなさい」とあるように、主の死を告げ知らせるにしても、十字架とだけ言うのではなく、誕生、復活、昇天、臨在、再臨との関係で考えていくのである。その違いを示すためには、聖餐前部である御言葉の部の構成を考えること、そして聖餐の部との間を結ぶ方法を考えることになる。

全実体変化説に立つカトリックにおいても、形相が変化しない以上、聖変化前のパンと後のパンは司祭にも判別がつかない。両者を混ぜてしまえば選択することはできないのである。その違いはその礼拝に集い、聖餐に与ろうとする会衆の態度や表情によってしか判別できない。そして、その違いはパンの前にある、主の救いの物語によって、つまり御言葉の説教によってのみ生じるのである。

今日、存在論が衰退したこともあり、トマスやアリストテレスによる説明はカトリックでも余りされなくなっている。今日では、エドヴァルト・スキレベークスやペーター・ショーンネルベルクらの「しるしの意味変化説 transsignificatio」や「目的変化説 transfinalisation」などによる説明がなされつつある。これらの説は、キリストの賜物＝キリストの自己譲渡は、信仰者に向け

られているのであるから、パンは人間との関係性において意味や性質が決まるというものである。これは、テレビの「開運！何でも鑑定団」に似ている。この番組の面白いところは、一見こんなガラクタだと思うものに意外な価値がつくという点である。「何々にゆかりの品」と言って付加価値が付くことはよくあることであろう。例えば、ここに一足の靴があり、筆者が普段履いている靴であれば誰もそのような物を買わない。しかし、長島茂雄が巨人軍に入団した最初の年に、最初のホームランを打った時に履いていた靴だということになれば、百万円以上の値がつくかもしれない。あるいは、その辺に咲いている小さなタンポポ一輪にしても筆者が花売りになって「買ってくれ」と言ってもそんなゴミは誰も買わない。しかし、女の子が、病院で長く療養しているお母さんにそのタンポポをプレゼントし「お母さん、早くよくなってね。お母さんのことと大好き」と言って渡したとしたらどうだろうか。それは、お母さんにとつては何物にも代えがたい大きな価値を持つものに変化し、それをゴミ扱いにしてくず箱に投ずることはできないであろう。つまり、物の価値は単にそれ自体では決まらず、1・愛の有無、2・誰が誰にとつて人間関係、3・それにまつわる物語などによって決まるのである。同様に、パンやぶどう酒の価値も、主と人間、それによつて決まるストーリーリーによって決まるのである。パン一切れは僅かな値段であろうが、説教を通してそこにこめられたキリストの自己譲渡の物語が加われば、そのパンは無限の価値を持つ物に変化していくのである。以下、その日のパンを示すために、礼拝全体の道具立てをどのように行っているのかを説明する。

III 当教会の礼拝の梗概

当教会の礼拝は四部構成になっている。四部構成で考えるのは、ローマ式ミサの構造を参考にしている。即ち、1・開会、2・御言葉、3・聖餐、4・閉会の四部である。招かれたので集い、語られたので聞き、差し出されたので食し、祝福を受けたので出立するという構造である。2・御言葉と3・聖餐が礼拝のクライマックスであり、前後の1と4は、2と3を盛り立て、余韻を深めるために配置されるのである。

礼拝は週毎に変わることのない部分「通常文(教派により訳語が異なる)」と、週毎に変わる部分「特定文」からなっている。通常文が礼拝の骨格を形成し、特定文がその日の固有の意義を肉付けするのである。当教会の場合、どの週でも内容の変更なしに行われるのは、悔い改めと赦免、信仰告白、主の祈り、祝福、派遣などである。これに対して、内容が変更されるのは、招詞、賛美、開会祈祷、交読、聖書朗読、説教である。聖餐の部においては、不変部分は全体の構造、聖餐設定辞、配餐、受領である。祈祷は叙唱の思想を取り入れて一部変えている。また、パンと杯を受ける際に語る言葉も変わる。感謝の祈りも、定式のものに加えてその日のキリストやその日の教会を勘案して、一部内容を変えている。御言葉の部において聖書朗読や説教により「その日のキリスト」を指し示し、感謝の典礼の冒頭の叙唱において、これからいただくキリストの体がいかなる体なのかを説明しパンに至るのである。

A 開会の部。内容は、招詞、開会の賛美、十戒、悔い改め、赦免、賛美、司式者による祈祷。

1. 礼拝開式は招詞による。礼拝の始め方には、讃美歌をもって始める方式と御言葉をもち始める方式の二つがある。さらに、御言葉にも固定方式と変動方式の二つがある。当教会は変動方式の御言葉の朗読によって開式している。これは、1・主の招きに見る恩寵の先行性。主の恵み深い招きがすべてに優って先行する。2・聖書朗読の補完。後述するようにその日の御言葉の予型か対型を選択する。3・礼拝末尾の派遣との呼応。第四戒後半「六日間は働いて」によって私達は月曜日以降、それぞれの場に遣わされて働き、主の日に招かれ御言葉とパンによって養われ、再度、派遣される。この1+6のリズム、サイクルをもつて私達の生活なり一生なりは形成されている。以上を考えてのことである。

固定方式でよく採用されるのは、詩篇124:8「われらの助けは天地を造られた主の御名にある」である。カルヴァンの式文(ジュネーブにおける聖日礼拝式次第第134)においても使用されるこの聖句は、ローマ式ミサでも個人的階段祈祷において Judica me (詩篇42:1) の後に用いている。ルターもこれを用いている。

変動方式の招詞の選択は、1・教会暦を意識して行う礼拝の場合には教会暦に関連する聖句。教会暦はキリストを記念する方法である。時には一回性と一回性もあるが周期性という面もある。時の持つ周期性の性質を利用して、一回限りであったキリストの御業を通年で現在化するのである。2・連続講解説教を行う場合にはそれに関連する聖句。この場合、旧約講解の場合には新約、新約講解の場合には旧約を選ぶことにしている。選び方の思想は「型」である。事例を歴史の順序にはよらずキリスト中心で考え、キリストにおいて実現された事例を「原型」とし、それを予め示した事例を「予型」とし、キリストにおいて実現された事例が今日の私達に適用される事例を「対型」として選択するのである。この選択は思いつきではなく聖書研究の蓄積によって行う。単純に言葉の類比が思想の類比を意味しないことは勿論である。招詞はこの日のキリストを最初に示す役割を担うのである。

2. 十戒と赦免。律法の用法のとらえ方によってこの順序で良いのかとの議論がある。筆者は牧会経験において十戒の重要性を痛感し、本邦の教会の弱点の一つは十戒を明確に教えないことにあると考える。古来、主祷文、使徒信条、十戒が三要文と呼ばれ信徒はこれらを暗唱すべきとされてきた。悔い改め＝共同懺悔行為の文章は、会衆「主よ。私達は、思い、言葉、行い、怠りによって多くの罪を犯し、あなたの御心を悲しませて来ました。私達は、御前に罪を悔い改め、主イエス・キリストによるすべての罪の赦しを信じます」：牧師「ひとり御子イエス・キリストを死に渡すほどに世を愛された神が、あなたがたのすべての罪を赦して、永遠の命を与えて下さいますように」で、ローマ式の変形である。マルコによれば主イエスの公生涯最初の言葉は、1:15「時は満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」で、これは礼拝の要約とも言えるものである。

3. 開会の祈祷。礼拝における最初の公同の祈祷であり、当日の礼拝の意義を決づける祈りである以上その重要性は幾重にも強調されなくてはならない。伝統的な教派においてはこの祈りは特定文であり、その日ごとに内容が定められている。それは、この最初の祈りによって今日この礼拝において言葉とパンの

もとに記念され提供され受け取られるキリストがどのようなキリストであるかを指し示すためである。私達の教会の礼拝における開会祈禱には、果たしてどれほどの重さが与えられているだろうか。この祈りはコレクタと称されるがその理由には諸説ある。その中に「祈りを集める祈り」という説がある。私達はそれぞれに自己の願いを抱いて集って来る。礼拝の始めには、各自が各自の一周間を背負ってバラバラの祈り心でいる。同じ教会の中に商売敵もあれば恋敵もある。しかし、そのような状態のまま礼拝を捧げても、それは個人的信心業の集積でしかなく、キリストの一つのからだととしての教會的礼拝とは評価できない。その統一なき祈り心の一つに集め、さらに現在、天において祈っている主に深く一致させることが重要なのである。コレクタは閉会の部の終わりを告げる祈りでもある。信者は以上の項目により、自分の罪を悔い、赦しを受け、賛美と感謝に導かれ、祈り心一つにして、神の言葉を聞く備えを果たしたのである。

B 御言葉の部。これを古来、求道者・志願者のミサ (Missa catechmenorum) の礼拝と称した。また、アンテ・コムニオン (聖餐前部) と称するが、これはコムニオンに繋げることを深く意識した呼び名である。内容は、聖書交読、説教前の讃美歌。聖書朗読、説教、応答の讃美歌、信仰告白 (使徒信条)、主の祈り。

1. 聖書交読は現在、詩篇を連続して使用しているが、本来ならその日の聖書朗読箇所と関係づけらるべきであろう。説教前後の賛美は、特によく考えて説教内容に沿わせて選択している。

2. 聖書朗読は礼拝の最も重要な項目として行う。朗読＝アナギノースコウは「知らせる」ことを意味する。聖書中の人物で、個人的に聖書を読む者や黙読する者は皆無である。ルカによれば、微行時代後、メシヤとして顕現したイエスが最初に行ったのは、ルカ 4:16 「朗読」であった。まずは集いの中で音読が行われることが肝要である。朗読者は「神の言葉の代読者」であり、教会の中に今日の御言葉を明確に響き渡らせることをその使命とする。説教は聖書の解

説であり、またパンは御言葉あつてのパンであることを覚えて、まずは聖書の朗読が的確になされることが肝要である。そもそも、人間の不幸は耳を傾けてはならない被造物の声に耳を傾けたことに始まっている。私達の幸いは、私達を創造し御子による贖罪を成し遂げて下さった方の声に耳を傾けることにある。

3. 当教会では基本的に連続講解説教を行っている。教会暦上、重要な日についてはそれを優先して説教を行う。現時点で教会暦にテーマを採った説教は、復活祭、聖霊降臨祭、降誕祭の三大祭日、洗足木曜日夕礼拝、宗教改革主日、全聖徒主日に行っている。この場合も方式は朗読箇所の講解であるが、何カ所かを朗読して、いわゆる主題説教の形式を採る場合もある。いずれにしても、その日のキリストその日のテーマが明瞭になるように心がけている。尚、説教前後に説教者が祈禱を捧げるが、前は牧会者としての責任の下に教会全体を視野に入れ、招詞を味わいつつ、その日の礼拝の趣旨を織り交ぜ、聖霊の照明があるよう祈ることを心がけている。後はテーマに即して祈るが、説教の目指した事柄がさらに高められるように心がけている。そして聖餐礼拝の場合はそのテーマがパンと杯のもとに我が身に成るように祈る。

聖餐礼拝の説教では、今日の御言葉がその日の聖餐において、より確認されるよう、両者の関係に言及することがよくある。カルヴァンの聖餐を伴う聖日礼拝次第の記録 (「牧会者カルヴァン」エルシー・アン・マッキー p164-166) にそのことが残されている。「私達は聖晩餐の中に、このことの目に見える具象化を持っております」「ここから私達は、聖晩餐からどのような益がもたらされたのかを学ぶことができます。それは福音のすべての約束の封印のごときものです。～事実、主は御自身を私達のためにお与えになりました」と。

4. 主の祈りは、聖餐礼拝の場合には聖餐準備の祈禱として位置付けている。主の祈りは福音派の礼拝では礼拝の初めの方に置くことが多く、当教会でも以前はそうようにしていた。主の祈りは「全福音の要約」(デルトリアヌス De oratione) である。また、糧の中の糧である御言葉とパンを思い、御心が天に成るごとく地にも成るようにと願う。私達はまさに地にある者であり、地とは地球上とかこの地域と言った抽象論で終わらず、この地上にあるこの私、この地

上の教会がそれである。この信徒である私、この信徒の集いである教会に御心が成らずして、どうしてこの地上に御心が実現するであらうか。受胎告知を受けた際のマリヤのようになら 1:38 「ほんとうに私は主のはためです。どうぞ、あなたのとおことばどおりこの身になりますように」という決意を持ち、それを天からのパンであるキリストをいただくことで実感するのである。

また、この地上にあって赦されたとは言え、未だ完成に至っていない私達にとって、罪の赦しは日々の大きな課題である。聖礼典は、地上的要素に神の言葉の約束、特に、罪の赦しの約束が付されたものであり、主の祈りによって罪の赦しを祈ることには大きな意義がある。

「御国が来る」は終末や天の祝宴と関係している。やがては天の御国において、勝利の教会の聖徒と共に祝宴に与るのである。ベンゲルはグノモンにおいて、御国が来た時、主の祈りは完了形に変わり讃美歌に成るとして「天にいます我らの父よ。御名はあがめられ、御国は来たり、御心は地にすべて成りました。我らに必要なものはすべて与えられ、我らの罪はすべて完全に赦され、試みはやみ、悪は滅び去り、我らは試練と悪から完全に救い出されました。国も力も栄光もまったくあなたのものとなりました。アーメン」と注解している。今現在、私達はこの地上にあって主の再臨まで待望の時を過ごしている。1 コリント 11:26 「主が来られるまで」救いの完成を願いつつ、パンによる養いを受けていくことになる。

主の祈りは「我ら」の祈りである。決して「我が父」ではない。この我らの中には、兄弟姉妹達が含まれており、教会の祈りとして献げられる。さらにこの我らの中には、本来の神のひとり子イエスが含まれている。本来、神を父と呼びうるのは、ひとり子イエスだけのはずだが、我らにもそれを許可しているのは、我らが神の子として御子イエスと同じ身分、同じ扱いを受けたことの証左である。さらにこの我らの中に現時点で未だ含まれていない方々もやがては含まれて欲しいという願望を込めれば、この祈りは伝道の祈りともなる。そもそも、主イエスの死は、主が神を父と呼んだことに起因している。ヨハネ 5:18 「ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたから」と。この祈りで神を父と呼ぶことによって、私達の救いが御子イエスの命をかけたものであったことを知るのである。

C 聖餐の部。これを古来、信者のミサ (Missa fidelium) と称した。内容は、聖餐の讃美歌、スルスムコルダ、未信者と陪餐停止者の排除、祈祷 (叙唱的内容を含む。物素と会衆に関するエペクレシス)、設定、配餐、受領、杯の回収、感謝祈祷 (未受洗者への祝福を含む)、沈黙、献金 (奉献唱を歌いつつ)、感謝祈祷。

1. 未信者と陪餐停止者の排除。洗礼を受けていれば陪餐可能。幼児洗礼受領者の場合は信仰告白式ないしは堅信礼を経ている者に限る。他教派であっても「一つ」の洗礼を重視して許可している。未信者にも無制限に許可するフリー聖餐は否定する。なお、トマス・アクイナスは神学大全 III・44・80 で聖体を拝受・食する仕方を、霊的 spiritualiter と秘跡的 sacramentaliter に二区分すべきであると論じ「秘跡がその結果なしに拝受されるところの秘跡的食事 manducatio sacramentalis は、人がこの秘跡の結果～信仰と愛を通じてキリストと霊的に結びつけられる～を取得するところの霊的食事 manducatio spiritualis とは反対のもの」と説明しているが、私達の聖餐における「霊的」についてその具体的表現を問う内容である。アウグスブルク信仰告白弁証第7条「教会は～多くの偽善者や悪人がこの世にあっては混じり合っていて、外的なしるしにおいてのみでなく、悪いキリスト者によっても与えられ受け取られる」などと深い関係がある。

2. スルスムコルダは聖餐の中心部分に入る前の対話句で、司式者と会衆の間の一種の挨拶である。司「主はあなたがたとともに」：会「また、あなたの霊とともに」。司「心を上に」：会「主に向けています」。司「私達の主に感謝をさげましょう」：会「それはよいこと、正しいことです」と言う内容である。復活の主が集会に集う者達と共にあること、今は天にあってとりなし続けている主に心を向けること、感謝が私達のなすべき最も大切な事柄であること、そもそも聖餐が感謝そのものであることを覚える。当教会では文章を少し整え、高らかに晴れやかに行っている。

3. 叙唱。本来ならここで叙唱を唱えて、今日の御言葉と今日のパンを連結するのであるが、当教会では文章を作成整理するには至っていない。しかし、叙唱は御言葉とパンを結ぶ架橋の働きを担っているので、筆者は、説教や聖餐祈祷や聖餐前の言葉において、それに代わる役目を持たせている。カトリックの待降節のミサの叙唱のあるものは以下のような内容である。「聖なる父、全能永遠の神、いつでも主・キリストによって賛美と感謝をささげることがは、まこととしようといいたいせむせむな務めです。キリストは人間のまじめさを帯びてこの世に来られたとき、父の定められた愛の計画を実現し、わたしたちに永遠の救いの道を開きになりました。栄光を帯びてふたたび来られるとき、いまわたしたちが信頼してひたすら待ち望んでいることは、すべてかなえられます。神の威光をあがめ、権能を敬うすべての天使とともに、わたしたちもあなたの栄光を終わらなくほめ歌います。スルスムコルダの最後の「感謝はなすべき正しいこと」を受けて「いつでもどこでもあなたに感謝をささげること」と始まり、主がなしてくださった御業を簡明に述べることによって感謝の理由を説明し、天使と共なる賛美へと繋げている。すなわち、叙唱はその日の礼拝の意義を確認し、その日のパンがいかなるパン、いかなるキリストであるかを説明する「小さな説教」の役目を帯び、その後の賛美に続ける役目を持っているのである。

この待降節の叙唱においては待降節の意義が、かつて来臨した初臨のキリストをおぼえることのみならず、将来の二回目の来臨である再臨をも同時に視野に入れていくことがわかる。待降節の主要な意義は再臨待望にあるのである。かくして、かつて一度限り行われた事柄とこれから行われる事柄が、今この時にいただくパンのもとに想起され、その日の御言葉とパンが連結されるのである。その日、御言葉によって啓示された事柄が、その後のパンによって具体化され、食されることによって私達のものになるのである。

4. 聖餐式文は、聖餐設定記事の朗読を核にしたシンブルなものを使用している。特別な奉獻文のようなものは作成していない。主イエスの制定の言葉それ自体をできる限り明朗に読み、言葉を堂内に響かせるように努めている。決して、陰鬱にしないように心がけている。ただし、重要な概念である「アナナムネーシス」を表現するには「わたしをおぼえて」より「わたしを記念するため」の方

が良いと考え、そのように読んでいる。

プロテスタントは啓示の源泉としての聖伝を認めていない。啓示の源泉は聖書のみである。聖餐に関しても同じ原則の下に行うべきであって、私達の教会は「聖書の記述をそのまま用いて聖餐を行う教会」なのである。従って、聖書に記された文言をそのままに朗読することが必要なのである。対して、聖書を重んじつつも聖書完成以前から礼拝の中に保存されていた言葉を用いて聖餐を行うのがローマカトリックや正教会である。これらの教会では、自己の靈性は主に聖伝に見いだされるのである。

聖礼典の有効な執行については、物、言葉、意向の三点セットで考えている。DS1312「秘跡は三つのものから成り立っている。すなわち、質料としての要素と、形相としての言葉と、教会が行うことを行う意向をもって秘跡を授ける人である。この中の一つが欠けても秘跡は成立しない」とある。私達にはなじみの薄い考え方が事柄を整理し、手抜きなく有効に聖礼典を執行するために有益な考え方であろう。1・主イエスの制定された物、洗礼なら水、聖餐ならパンとぶどう酒（当教会ではパンはパン焼きの技術を持つ教会員が焼いて献げた物を使用。小奉献と大奉献にあたる。杯は聖餐式を意識して作られたと言われるウエルチのジュースを使用。カルヴァンは綱要IV：17：43で、パン種の有無、ぶどう酒の赤か白かは問わないとしている）。2・主イエスの制定の言葉。洗礼なら「父と子と聖霊の御名によって洗礼を授ける」、聖餐なら「これはわたしのからだである。これをとって食べなさい。これはあなたがたのために流されるわたしの契約の血である。みな、この杯から飲みなさい」である。これを言わなかったり言い損ねたりすると無効になるので、その場合は必ず再度言うことにしている。3・主イエスの意向に沿った意向。主イエスがこの礼典において何をしたかったのかを、司式者も会衆も自らの意向とする。もともとカトリックの場合には有効に叙階された司祭ということになるが、叙階されたことは当然、キリストの意向を持つことを含むと考えられている。私達にとっても、物を整えること、司式者の資格を整えること、設定の言葉を明確に発すること、が、礼典を有効に行うために重要であることは同じである。

なお、トマス・アクイナスは神学大全第3部秘跡論60・7で「秘跡において言葉は形相、可感的な事物は質料という位置を占めている。ところで、質料と

形相から複合されているすべてのものにおいて、確定の根源は、ある意味で質料の目的であり、終極であるところの形相の側に求められる。したがって、事物の存在 *esse* のためには確定された質料よりも確定された形相がより主要的に必要とされるのである」と書き、形相である言葉の重要性を述べている。また、トマスは大全 60・6「秘跡の意味表示においては言葉が必要とされるか」の異論への反論の中で、「秘跡は受肉した御言葉と類似している」ことから「受肉の神秘においては可感的な肉体に神の御言葉が合一せしめられたごとく、秘跡の場合も可感的な事物に言葉が付加される」と記し、また、「人間は靈魂と身体から合成されており、可視的な事物を通じて身体に触れ、言葉を通じて靈魂によって信じられる」ので秘跡には可感的事物に加えて言葉を要するとしている。さらに、秘跡における「秘跡の意味表示」が完全なものになるために「可感的事物による意味表示が何らかの言葉によって確定されることが必要である」と説明している。物はトマスの表現によれば「可感的事物」である。私達は物を認識するには視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感、つまり感覚器官に感じることの可能な物を必要とする。主は、感覚器官を用いなければ何かがあると知ることのできない私達に、ご自身とご自身の救いの恵みを知らしめるために、可感的事物を採用されたのである。トマスは「秘跡は人々の聖化へと向けて用いられる」と記している。そしてそれを確実に実現するために、物に言葉を付加するということである。

このことは、主の受肉においてすでに行われていたことであつた。ヘブル2:14「子たちが血と肉を持っているので、主もまた同じようにこれらのものをお持ちになった」のであり、それは天使ではなく人間を救うためだったのである。つまり可感的事物から成り可感的事物のみを知ることのできる人間を救うためには、可感的事物と言葉の組み合わせが必要だったのである。ヨハネ1:18「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされた」や、天の父を見せてくださいと願ったピリポに対する主イエスの答、ヨハネ14:9「わたしを見た者は、父を見たのです」も思い出されるところである。

5. 「たびごと」について。ヘブル書には「一度限り」が多用される。これは、

宗教改革者達のカトリック批判の武器となった。私達はカルバリの流血の犠牲が祭壇上では無血の犠牲により反復されるという説は認めることができない。しかし、聖餐には「たびごと」の面があるのではないだろうか。1コリント11:25-26「夕食の後、杯をも同じようにして言われました。『この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい』ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」。ここには、主の死という過去の事件、主が来られるという将来の事件が「たびごと」で結びつけられている。黙示録11:6（新改訳）では同じ単語が「何度でも」と訳されている。主の生涯なり犠牲なりは、確かに年表上一度限り行われた事柄ではあるが、聖餐の場においては「たびごと」に行われることを意味しているのではないだろうか。年表上一回限りであることは、主の犠牲のみならずすべてに共通している。すべてのことは繰り返されることはない。しかし、それで過去に一度限り行われた主の死を過ぎ去ってしまった事柄として扱うのでは信仰を継続することは不可能になる。食べるたび、飲むたびごとには重要な事柄なのである。

オード・カーゼルは「秘儀と秘義」p214で「神の今」に注目し「典礼秘義は、ことばと儀式によって主の救いの行為を現存させる。神には現在しかない。神には過去も未来もない。神はあらゆるものが集中している点である。～神について、ただ『今』『神の今』があるだけである。～神は、われわれが生きている間にこの神の現存と永遠の今日の中に踏み入れることを可能にしてください。それは典礼秘義によつてはじめて可能となる。そこには、われわれにとつても過去や未来はなく、ただ現在だけがある。主の死去のような歴史的には過去に起こったことも、またキリストの来臨のようなまだ起こっていないことも、秘義の中に現存している」と記している。

6. 杯の回収後にごく短く沈黙を設けている。沈黙は何もしない無の時間ではなく、聖靈の働かれる意義深い有の時間である。僅かな時間ではあるが、この間は教会全体が静まって、聖靈の働きに期待したエペクレーシスの実りがあるようにするのである。

7. 病床陪餐は積極的に行っている。その際、牧師と受領者の個人的関係にならないように同行者と共に赴き、教会が表現されるように留意している。病床陪餐の際、カトリックでは保存された聖体を使用するが、当教会では聖体保存は行わない。ルターの言うように聖餐は場所的時間的に限定されるべきだからであり、病室で聖餐の設定を行っている。私達はキリストの体が御言葉抜きにしてもそこに存在するとは考えていないからである。御言葉あつてのパンなのである。病床陪餐の際には「子よ、安心しなさい。あなたの罪は赦されている」と赦免を与える。聖餐は「罪の赦しの約束付きの食物」だからである。死の危険が迫っている時には「旅路の糧」として行っている。経口的拝領が困難であれば、見るなり嗅ぐなりの五感により分る形で行っている。筆者もやがて迎える臨終の際に、牧師から罪の赦しの食べ物としてのパンをいただき、多くの恥ずべき罪に対する赦免を受けることを衷心より願っている。

D 閉会の部。内容は、報告、頌栄、祝福（使徒的祝福と大祭司的祝福を月毎に交互に）、派遣。説明は割愛する。

IV まとめ

何故、聖餐があるのだろうか。それは、今現在、主イエスと直に会うことができないからである。教会の存在も、主イエスがこの地上に不在だからである。もし、地上に主イエスがいますなら、教会も牧師も聖餐も不要であるに違いない。私達は過去の主と会うことはできないし、将来の未だ再臨していない主と会うこともできない。カルヴァン主義的外部（ハイデルベルグ信仰問答第47問、第48問）によれば、今、天においてとりなしの最中のキリストともこの地上で会うことはできない。私達と全く同じ人性を持つが故に仲保者たりうる主が、今この地に再臨を待たずして到来するなら、その人性は私達の人性とは異なるものとなり、仲保者であることを辞さなくてはならなくなる。天上のイエスが人性の制限の故にこの地上にいないことができないのであるなら、この地上にいる我々が天上に昇ることは、もつと困難であるに違いない。聖餐があるのは私達が天上に昇ることができないからでもある。しかし「今、ここ」の制限

を持つ私達が、その制限を越えて、生ける主と「今、ここ」に会うことができる場がある。それが礼拝である。御言葉の説教と聖餐なのである。トマス・ア・ケンピスの「キリストに倣いて」4:11:4にも「二つの食卓」の養いという言葉があった。御言葉の糧の食卓＝説教壇と聖餐の糧の食卓＝聖餐卓。こここそ私達は今日のキリストと出会うのである。

（日本同盟基督教団・愛知泉キリスト教会牧師、東海聖書神学熟講師《新約概論、礼拝学担当》、非学会員）

参考文献

カトリック関連

「デンツィンガー・シェンメッツァー カトリック教会文書資料集」(浜寛五郎訳 エンデルレ書店 昭和57年 改訂版) 文中ではDSと表記。

「倫理神学概論第2巻」A・ファン・コール (浜寛五郎訳 エンデルレ書店 昭和51年)

「倫理神学叢書 キリストの掟1」B・ヘーリンク (中央出版社、昭和49年、第3版)

「神学大全」41～44 トマス・アクイナス (稲垣良典訳 創文社、2005年)

「主の晩餐—聖体祭儀の神学」P・ネメシエギ (南総社 1968年)

「公会議解説叢書VII 公会議資料文書全書」 南山大学監修 (中央出版社 1969年)

「ミサ典礼書の総則と典礼暦年一般原則」 日本カトリック中央協議会 (1980年)

「秘跡について。トリエント公会議教理提要による」(岩村清太訳 中央出版社 昭和41年)

「ミサ その意味と歴史」 土屋吉正 (あかし書房 1977年)

「ミサ」J・A・ユングマン (オリエンス宗教研究所 1992年)

「礼拝の刷新」 土屋吉正 (オリエンス宗教研究所 1985年)

「超越の神秘」 H・J・フォン・バルタザール (サンパウロ 2000年)

- 「聖体祭儀」J.ユングマン (南窓社 1968 年)
- 「ミサ」J.ユングマン (オリエンツ宗教研究所 1992 年)
- 「古代キリスト教典礼史」J.ユングマン (平凡社 1997 年)
- 「秘儀と秘儀 古代の儀礼とキリスト教の典礼」オード・カーゼル (みすず書房 1975 年)
- Lechner & Eisenhofer, *The Liturgy of the Roman Rite* (Herder and Herder, 1953)
- J.A.Jungmann, *The Mass of the Roman Rite* vol.1&2(Benziger Brothers, inc, 1950)
- Gregory Dix, *The Shape of Liturgy* (Dacre Press, 1945)
- プロテスタント他関連
- 「キリスト教綱要」ジャンカルヴァン (渡辺信夫訳 新教出版社 1978 年 第 12 版)
- 「牧会者カルヴァン」エルシー・アン・マッキー (出村彰訳 新教出版社 2009 年)
- 「宗教改革者の聖餐論」赤木善光 (教文館 2005 年)
- 「ハイデルベルク信仰問答」(新教出版社 1993 年)
- 「アウグスブルグ信仰告白」「一致信条書」所収 (聖文舎 1982 年)
- 「アウグスブルグ信仰告白弁証」「一致信条書」所収 (聖文舎 1982 年)
- 「シュマルカルデン条項」「一致信条書」所収 (聖文舎 1982 年)
- 「キリスト教の礼拝」J・F・ホワイト (日本基督教団出版局 2000 年)
- 「キリスト教礼拝の歴史」J・F・ホワイト (日本基督教団出版局 2002 年)
- 「聖公会の礼拝と祈禱書」森紀旦編 (聖公会出版 1989 年)
- 「ローマ・ミサにおける感謝の祭儀概論」礼拝・音楽研究誌所収のシリーズ 坂本誠 (東京キリスト教学園教会音楽アカデミー)